
正義と正論とその他

志内炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義と正論とその他

【Nコード】

N6903D

【作者名】

志内炎

【あらすじ】

私は、小さい劇団に所属している。裕福な団員が多い中で、私は貧乏な団員に属する。そんな劇団で、ちょっとした争いが起る。

姫（前書き）

この小説は、完全なフィクションです。

姫

私は小さな劇団で、劇団員をしている。

小さな劇団とはいえ、貧乏団員は他の劇団に比べて、そんなに多くない。大学時代の同級生がメインで作った劇団で、その大学というのが屈指のぼんぼん学校だからだった。中小企業のスポンサーまでついているおかげで、団費もそれほど高くないし、公演のチケットノルマも、それほど多くはない。実はそれを理由に私はここに入ったのだが、私はお金持ちではないから、アルバイトに明け暮れている。

ある公演の後だった。

「こいつ、また来てる」

姫が言った。もちろん、本名ではない。だが、みんなそう呼んでいる。私だったら、そんな呼ばれ方、いやだけど、彼女の場合、実の父親からもそう呼ばれているから違和感はないらしい。毎回初日と千秋楽には……といったもたいてい三日公演くらいだから六回に二回は見に来ている。スレンダーで美人な彼女とは違って、社長善とした恰幅のいい、優しそうだが決して美男子ではない人だ。

姫は端正な顔立ちをゆがめて、会場でとったアンケートを見つめていた。

「だれ？」

なかさんが流れるような動作で振り返りながら聞く。昔はクラシックバレエをやっていたらしく、動作がとても美しい。目鼻立ちだつてはつきりしているのに、芝居では好んで老人や悪役をやる。

「こいつよ、橋本とかいうやつ」

稽古場はしんとする。姫は苦々しい顔をしてあたりを見回す。

「今回のアンケートの仕分けしたの、だれ？」

みんな首をかしげて、お互いの顔を見つめあう。ざわめくが誰も名乗り出ない。

「どうしていい評価と悪い評価をちゃんとわけないの？」

アンケートは毎回、評価別に分けられる。もちろん全員両方に目を通すが、本番間近になると気分を高めるために、いい評価を見直す人が多いためだ。

「気持ちを上げようって時に、酷評なんてみたらめいるでしょ」姫の提案だった。誰も反対する人はいなかった。

「……最低だ」

姫の手から奪ったそのアンケート用紙をなかさんが読みあげた。ざわめきかけていた稽古場が再びしんとなる。柔軟体操をしていた人も新しい本に目を通そうとしていた人もぴたりと止まっている。私は背筋を冷たいものが走るのを感じていた。

「全く、小学生の学芸会と変わりない。それも習いたての英語劇のようだった。ストーリー自体には、ありきたりではあるが、いいものを感じなくもない」

「やめてよ」

姫が低い声で制する。なかさんは知らん顔で続ける。このときばかりは、なかさんの演技力が疎ましい。姫以外の全員の視線が泳ぎ始める。

「だが、役者ひとりひとりの本の解釈が異なるのではないか。とくに主役の女優は……」

「もう、いいわよ!」

なかさんの手から、アンケート用紙がぐしゃりという音を立てながら姫にひつたくられた。なかさんは無言で、くしゃくしゃになったアンケート用紙をにらんだ。姫は、はっとしたようにそれを開いて、悪評の方に乗せ、手でしわを伸ばしてから、真ん中あたりにしまいこんだ。

「……さあ、練習しましょう」

当然、いい練習ができなかったフラストレーションからか、鶴の一声ならぬ、姫の一声がかかった。

「飲みに行くわよ」

みんな無言で着いていく。大体が、いやな顔をしている。私はそれほどいやではなかった。姫の掛け声のときは、彼女の関係者なのかなんなのかのイタリアン店に行くので、ただである。貧乏な私は一食浮くし、普段では食べられないような黒い貝の酒蒸しやらヨーグルト漬けチキンやらが食べられるだけでよい。それに私は本当に端役なので特に彼女からお声がかかるわけでもない。端席で聞いているふりをしながら、食べていけばいい。

お客様

店のオーナーはいつものようにニコニコしながら、私たちを迎えてくれた。この人も私と同じだ。本当は突然大人数でこられたら、ちよつと迷惑だけど、お客様ですから。儲かればそれでいい。同じにおいがする。

いつものように端席に……座ろうとしたが、だんだんと押されてなんだか真ん中あたりまで押しやられてしまった。ちよつといやな感じもしたが、

「まあ私にいろいろいはずもないだろう」と、従うことにした。それに案外なかさんの近くだったので、ちよつと聞いてみたいこともあった。

「今日はお疲れ様。ちよつと場の雰囲気が悪くして悪かったわ。また明日から気持ち新たに頑張りましょう」

姫はにこやかに、乾杯の音頭をとって、それが済むと脚本家と演出家と話始めた。なごやかな姫の表情にみんなもほつとした感じで飲み始めた。

私は、とりあえず食べることに専念した。劇団に入って半年だが、あまり仲のいい人はできない。裕福組とは生活のリズムが違うし、貧乏組はそれぞれに忙しく、話をする時間もない。それに、貧乏組のほつがなんだか寡黙な人が多い気がする。

(……って思ってたけど、それでもないか)

私の目の前に座ったゆうちゃんは、貧乏組のはずだ。だが、さっきから熱心になかさんに話しかけている。

「バレエは何年やっていたんですか？」

「どの先生に教わったんですか？」

「演劇に転向したきっかけは？」

「恋人はいるんですか？」

「せりふを覚えるときに注意することは？」

そばで聞いているだけでもおなかがいっぱいになりそうなくらい。まるでテレビのリポーターだ。なかさんもそうするのは苦手なのか、「うん」とか、

「いや」とか極力短く答えていた。気の毒に。

「君、よく食べるね」

しばらくぶりのなかさんの意味のある発言にふと顔を上げると、私にいつているようだった。私はフォークにこれでもかというほど巻きつけたカニっぽい味のするパスタを一口でいこうと大口を開けている最中だったので、

「はい」と答えるつもりが、若干、

「ほい」になっちゃった。

「ああ、邪魔してごめん。一口でどうぞ」

なかさんは笑いながら手で私を即したが、あまりの罰の悪さにフォークを置いた。そして、そのフォークを見つめた。

「本当にごめんね、どうぞ、召し上がれ」

「あの、そうじゃなくて……私もなかさんにひとつだけ質問があります」

「ひつだけね。なんででしょうか？恋人ならいません」

「それはさつき……聞こえていました。あの……なんで主役をやらないんですか？」

ゆうちゃんも深く頷いた。なかさんはものすごく渋い顔をして、ひじを突いて細いけれどがっしりとした指を鼻先で組んだ。そうして、ゆっくりと、噛み締めるように言い放った。

「主役って、せりふが多いじゃない」

私たちは、黙ってその続きを待った。でも、なかさんは口を開こうとしない。

「それで？」沈黙を待てなかったゆうちゃんがきく。

「それだけ」

「……それだけ、ですか？」

「そつ」

私たちはなぞなぞを出された子供のように息をつめて頭をフル回転させた。その言葉の真意とは、なんぞや？今度の沈黙を破ったのは、なかさんだった。言葉ではなく、笑い出した。ひとしきり笑ってからいった。

「ごめん、ごめん。二人とも物凄く眉間に皺がよってるんだもん。俺ね、せりふ覚えられないの」

「冗談でしょ？」

「間違えた。覚える時間がないんだ。俺、バンドもやってるから」

「はあ……」

「ああ、なかさんならそつちでもいけるかもしれませぬ……」

ゆうちゃんの見方は最後まで聞こえなかった。

「冗談じゃないわ！」という姫の声でかき消された。

姫は少し赤い目をしていたが、それでもしつかりとした口調で、怖い顔でこちらを見ていた。

「そつちでもいけるなんて、そんなこといわないでよ」ゆうちゃんは完全に固まってしまった。

「どうして？俺はそういわれてうれしいぜ？」姫の視線はなかさんへ移っていった。

「だいたい、せりふ覚える時間がないから主役やらないなんて、よくそんなことが言えるわよね。他の団員を馬鹿にしてるの？役が欲しくてももらえない人もいるのよ。それを二束のわらじであつちが忙しいから、なんて理由あり？暇つぶしの劇団なら、やめれば？」

「そんなことはいってないだろ。俺は俺なりに大切にしているさ」全員がまた押し黙っていた。それでもなんだか、稽古場での雰囲気とは違った。うまく説明できないけれど、なんとなく。

「俺なりにつてなによ。私たちはね、本気でプロになりたいの」どくん、と心臓が音を立てる。

「この道で食べていきたいのよ」

誰も呼吸していないんじゃないかと思った。なかさんが鼻で笑う

音がする。

「へえ……そんな人たちが酷評からは目をそらすんですかね」

「そらしてなんかいいわよ」

「あの、橋本さんのはどうなんだよ」

「あいつは別よ。毎回毎回……幼稚園だの小学校だの、ひ、一人工ツチだの！何様だつていうのよ！酷評するために来てるほうが一人エッチじゃない！」姫はそういつて。困ったように目を泳がせた。運悪く、私は目が合ってしまった。

「あなただつてやる気をそがれるつて思わない？」

鼓動が大きすぎて、何も聞こえない。鼓膜が押されて痛くて、何を聞かれたのが判断できない。言葉がでて来ない。

何も聞こえないのではなかったことが、数秒後にわかった。誰も何も言わなかったのだ。その証拠に、沈黙を破ったなかさんの声が聞こえた。水中にいるように、くるまれたようにだけれど。

「もう、いいよ。やめる」

「待てよ」

脚本担当の音がする。なかさんは立ち上がり、出て行こうとしている。

「やめるつて、芝居やめちゃうのかよ？」

なかさんはその声に止まって、振り返った。物凄く、ニヒルな笑顔をとたえて。

「芝居？やめるわけないだろ。俺はプロになるんだよ」

その後、なかさんを止める人は誰もいなかった。姫の声が開きを告げている。みんなが立ち上がったたり、上着を着たりしている。すべてがスローモーションに見えていた。私を現実に戻したの
は、ゆうちゃんだった。

「……しょに行こう」

「え？」

ゆうちゃんは私の腕をゆすりながら、必死の表情で訴えていた。

「二次会、行くからつて。一緒に行こう」

「でも……」

眉間にひどく皺がよって、眉が八の字を描いている。くりくりのまつげの向こうにはうつすらと涙が浮かんでいる。

「……うん」

私には選択の余地がなかった。

甘くて辛い、幸せか

どこをどう歩いたかよく覚えていないけど、なんだかすごく安い居酒屋に連れて行かれた。姫も来たらいやだな、と思っていたけれどその入り口を見て、こんなところに姫は一緒にこないってことがわかったからちょっと安心して中に入れた。私はもちろん、ゆうちやんと隣に座る。

二次会といっても、さっきのメンバーの半数はやってきていた。みんな口々にさっきの出来事を話している。

「なかさん、バンドやってたんだ」

「知らなかったの？たち稽古入っても時々遅刻してきてたじゃん」

「まあ、そっちでもいけそうだからな」

ゆうちやんは申し訳なさそうに小さくなる。

「あはは、せめてるんじゃないよ。正直いうと、俺、なかさんのこと、気に食わなかったんだよね」

「お前はあれじゃん？なかさんにあて書した役やらされた恨みだろ」

「それはないよ。まあ、正直やりにくい役だったけど、俺っぽく台詞回し変更させてもらったし」

「俺も実は苦手だ。結構言いたいことという人じゃない？」

「でも、結構正論だったりしない？あ、別になかさんラブだったわけじゃないよ？」

私は支払いのことが気になって、壁にべたべた貼ってある、油とヤニで黄色くなったお品書きを見ていた。

（いかの沖漬け、にひゃくはちじゅうえん……あげだし豆腐、さんびゃくはちじゅうえん……生ビール、さんびゃくはちじゅうえん……）

でたらめに並べられたお品書きを順々に心の中で読み上げる。『手羽先の甘辛煮』は『甘辛』が『甘辛』なっているように見える。『気になる。』

「正論でも、なんつうか、いいかたとかあるじゃん。空気読めよ、的な」

「まあ、わかるけど……空気読めない子ちゃんはここにもいるじゃない」

頭をぽんぽんとされて、やっと自分の話だと気づいた。

「あの質問に無言はないよな」

「まあね。姫は相当困ってたと思うぜ。一人エッチとか言っちゃった自分にだろうけどね」

そんなに悪いことだったのだろうか。私には質問自体がよくわからなかった。わからないことに答えるのは失礼だ。

「正論でいえば姫も正論よね。評価をいいのと悪いのにわけて、モチベーション上げるのに利用するのはいいと思う」

「そうだね。『ファンになりました』って読んで『よし!』ってなってるときに、次に飛び込む文字が『今回もお遊戯でした』じゃ立ち直れないかもしれない」

「主役の器かどうかは別にして、凄みはあるもんな」

「それに彼女のおかげで安く芝居できるしね」

『辛』なのか『幸』なのか……みんなの目を盗んでみる。でもここからじゃ、よく見えない。近くにいつて見たい。そのついでに、向こうの席にある焼きおにぎりらしきものを一つ失敬して来たい……
「あのととき、空気読めない子ちゃんがんばんか言ええば、なかさんも出てかかったかもな」

「え?」

ゆうちゃんは私の隣でうつむいて黙っていたが、かすかに頷いた。仕方なく私もうつむいてみた。お品書きは、全く見えなくなっってしまった。

「なんていえば出てかかったかな」

気になる。

「そつだなあ……『すみません、読んでません』とか?」

焼きおにぎり、食べたい。

「あ、それ妥当かも。姫に怒られそうだけど」

そういえば、カニのにおいのする Pasta も食べ損ねた。

「でも、多分なかさんは出ていかなかったわね」

……だめだ、我慢できない！

「あの！」

私は、上着を持って、かばんから財布をだしながらいった。

「私どうしても、気になることがあるので……お先に失礼します」

「あれ？気にしてるの？」

「いえ、本当に個人的なことなんですけど！すみません」

三千円くらいでいいか、と思ったけれど財布のなかには五千円札しかなかった。仕方ない。私はそれをゆうちゃんに渡した。

「あとでおつり返して。では、お先に失礼します」

私はお品書きをチェックして、テーブルを後にした。

「言い過ぎたかな？」

「大丈夫ですよ。彼女、見た目はいいけど、人の話聞いていないところあるから」

「うわ、それひがみ？」

「まあ俺は空気読めないでくれてよかったよ。だって見たかよ、なかさんの最後のあの態度。俺はプロになるって。俺には『俺はお前らとは違う』って聞こえたね」

「ああ、みんなそう受け止めたんでしょ。だから誰も止めなかったんじゃない……」

声が遠くでするがどうでもよかった。

『甘辛煮』はちゃんと『甘辛煮』で、『幸』に見えたのはくもの巣のような埃が油でくっついてしまっただけだった。

（はあ、すっきりした）

私はきしきしなる階段を軽やかな足取りで上がって外に出た。

口止めにぎり

が、それも束の間。なけなしの五千円札を渡してしまった。二駅分も歩けば家に着くからそれは何とかなるが、明日からの食費をどうしようか。ネットバンクにお金は入っているが、今月はこまめに出し入れしてしまって、今度出金すると手数料を取られてしまう。(仕方ない。五百円玉貯金をつかうか)とても残念な結末にたどり着いたのは、稽古場の脇の道だった。

「ひゃあ！」

稽古場から走り出てきた人影と危うくぶつかりそうになった。人影は美しい動作で私を交わす。

「なかさん？」

顔を見たわけではなく、動作でわかった。顔は見られなかった。私の目は、その手に握られた紙に釘付けになっていたから。一度丸められて、広げられたあとのある紙に。

私は公園のベンチで焼きおにぎりをほおばっていた。私の視線に気づいたなかさんは

「まいったな……あ、ちよつと来て」と、公園のベンチまで連れて行き、そこで少し待っているように言った。そして息を弾ませて帰ってきた手にはコンビニの袋が握られていて、焼きおにぎりが三つ入っていた。しかもちゃんとレンジアップされて。

「しかし、よく食べるね」

今度も大きな口をあけている最中の言葉だったから、ちよつと躊躇したけれど、今度は口に入れた。そしてもぐもぐやりながら、

「これは、口止め料ですか？」と聞いた。なかさんは、にやりと笑い「違つよ。最後の一口、食べ損ねさせてしまった、お詫びです」と言った。

「……それは、誰かの履歴書ですか？」

二つ目のおにぎりを開けながら、まぬけな質問をする。

「……違うよ」

「じゃあ、見なかったことにします。私も、悪いことしたみたいだから」

「悪いこと？」 思いつきりほおぼると、半分くらい口に入った。

「はい。姫さんに質問されたとき、空気読めなかったから」

「ああ」

なかさんは笑った。

「何を言われても、俺はやめたと思うよ。正直に言えば、あの場を利用したのかも知れない」

「利用？」

「そう。やめる区切りを探してた」

なかさんが前方を見た。どこを見てるかはわからなかったけれど、私もつられて前を見た。ブランコに何か乗っている。なんだろう。

「姫は……大学の同級生で、そのころ演劇のサークルに入っていたんだけど、知ってのとおりあの美貌に金持ちだろ？いつも主役だった。そのサークルからの卒業生での劇団もあるんだけどね、行ったら即主役のはずだよ。でもそこにはいかず、新しく劇団を立ち上げた」

「なんでですか？」

「主役だからさ」

ブランコが風で揺れる。でも物体は落ちない。

「姫はずっと脇役がやりたかったんだ。白雪姫なら毒りんごのばあさん、シンデレラなら意地悪な継母……それが、そうはいかなかった」

「姫さんが立ち上げたの？」

「そう。だからだよ。結局うちの……この劇団は姫で持ってるんだ。そんなあいつが主人公じゃないなんて、そこからクレームが来た。客も演劇が好きなんじゃない。姫を支えてやってる自分が好きなんだな」

「……ふうん」

なかさんの声が少しずつ遠くに行き始めた。三つ目の焼きおにぎりをあける。ブランコが大きく揺れたので心配になる。

「それでも最初は仕方ない。まずは集客を考えよう。そして、本当のお客さんが来るようになったら、やりたいことをやっていこう、ってね。でも、本当のお客さんが来始める前に『姫が主人公』って構図が固まってしまつて、その呪縛から逃れられなくなった。脚本も、演出も、劇団全体も、姫自身もね」

よかつた、物体は落ちてない。

「シンデレラの焼き直し現代版をやつた。もちろん姫はシンデレラで。そのとき初めて来たんだ、橋本さん。けちよんけちよんだつたよ。特に姫は『継母の役のほうがあつてる』ってね。姫は激怒した」「なるほど」

「まあ、人間真つ向から正論言われると腹が立つからな。でも、そうじゃなかつた。『馬鹿にしている』と、『一生懸命やっているのに馬鹿にされた』と怒つたんだ」

「はあ……」

さすがに三つもおにぎりを、お茶もなしに食べると口の中がねちよねちよする。

「……だんだんずれて来てた。気づかせようとしたけど、無理だつた。ちよつとずつ俺も孤立していった」

そろそろ中身のあること言っておかないと。

「それでバンドを？」

「いや。バンドはね、生の感覚を忘れないように始めたんだ。うちの……この劇団は、年に四本もやつてるから多いほうだと思つけど、それでもどうしても感覚が鈍るからね。バンドのほうがライブは回数やれる。少人数だから」

口の中の感覚が鈍る。身体から孤立してるみたいだ……

「孤立……」

「ああ、そんなのは気にするたまじじゃないさ。姫も、俺もね。……でも、気持ち伝わらないのには疲れてたな。もうやめるしかない

のなかった」

ブランコの物体は、どうやら泥団子をへばりつけたもののように、遠くからでも正体がわかってよかったと思う反面、ちょっとがっかりする。なかさんもどうやら前を向いたままだ。何を見ているのかはわからないけれど、泥団子ではないことは確かだろう。

「それでも……誰かが背中を押してくれるのを待っていた。結局、ここが好きだったんだよな」

「プロになるんでしょう？」

「ああ……あんなのは虚勢だよ。それくらい、みんな思ってるだろ。君を含めて」

私は立ち上がった。口の中の気持ち悪さが、限界に達していた。

「私、帰ります。あ、誰にもいいませんから」

なかさんは驚いた顔をした後、笑って頷いた。

「本当に、すみませんでした。『空気読めない子ちゃん』で」

「いや……送っていいんか？」

「大丈夫です、では」

私は半ば駆け出すように、その場を離れた。公園の出口に来たところではなかさんが呼びかけた。

「空気は読むもんじゃなくて、つくるもんだぞ、女優さん」

私は振り向いて、軽く会釈をした。そしてまた早足で歩き始めた。そして後悔した。おにぎりを三つとも食べてしまったことを。ひとつ、明日の分にとっておけばよかった。

大切なもの

なかさんがいなくなったことに触れる人は誰もいなかった。姫はあれ以来、ニコニコしている。それが逆に不気味だった。なかさんが持ち去った橋本さんのアンケート用紙も、紛失の話さえでなかった。私はなかさんが持ち去ったことはもちろん、話した内容も口外しなかった。言えといわれてもほとんど思い出せないけど。

時間は粛々と流れていく。一つ変わったことといえば、翌日すぐにおつりを渡してくれたゆうちゃんがやたらとなついてくることだった。今度の公演で、私もゆうちゃんも端役をもらったが、ゆうちゃんの役には一箇所、長台詞があった。事ある毎に練習に付き合わされた。うんざりした。

公演が始まって、いつもと変わりはなかった。姫は主役をやり、父親は初日を見に来て、客席はほぼ満員。ロビーにも姫の楽屋にも花があふれているが、私たち端役の楽屋には親族や友達からお義理で送られたおおよそ比べ物にならない花束が転がっているだけ。それでも、誰も文句を言わない。

事件が起きたのは、千秋楽直前だった。

トイレに行こうと、楽屋から廊下に出ると、ゆうちゃんが真っ青な顔をして立っていた。右腕を押さえている。肩から肘までぱっくりと割れている。ゆうちゃんはなるべく腕を遠くにしながら傷口を押さえようとしている。

「衣装が……よこれちゃう」

「……!どうしたの!」

私の次に気づいたのは姫だった。

「角材に引っ掛けて……」

「ああ、なんてこと」

姫は豪快にスカートの下に履いていたスパッツを脱ぎ、ゆうちゃんの手を縛った。

「姫さん、衣装が汚れます」

「そんなこと気にしてる場合じゃないでしょ?! 誰か! 救急車呼んで!」

その声に脚本担当が楽屋から飛び出してきた。他にも人が集まる。「あなたも! ぼんやりしてないで、それよこしなさい!」

「あ……」

私の腕から手拭タオルを引ったくり傷口を押さえる。

「今救急車はまずいよ」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ」

「私、できません。舞台立ってます」

「なに言ってるの! 傷跡残ったらどうするの? あなたは将来の大女優さんでしょ?」

その言葉にゆうちゃんは泣き出した。

そんな状況でも私は頭の片隅で、

(今トイレに行ったら、ひんしゆく買うんだろうな)なんてことを考えていた。だから、姫に指差されたときも、一瞬なんのことかわからなかった。

「あなたの代役は、彼女が立派にやり遂げるから!!」
幕が開いた。

救急車の到着を待つよりも、病院にいったほうが早いということ、脚本担当が連れて行った。衣装の替えがなかったから、ゆうちゃんの着ていた衣装の両脇を切つて脱がせて応急処置で縫い合わされた。ゆうちゃんは下にシャツを着ていたから平気だったけど、縫いあわせで少し小さくなってしまったから、私は衣装の下に何か着るわけには行かない。縫い目は直接私のわき腹に食い込んだ。

舞台上上がっても、わき腹が気になって仕方ない。終わって脱いだらきつと跡が着いているだろう。

「……!」

姫が台詞を言っている。時々私のほうを向く。それを合図に私はお辞儀をしながら、

『そのとおりでございます』という。何度も練習につき合わされたから、間違えることなんてない。

『……………!!』

跡はどんな形なんだろう。レースの部分があるから、その形も残っているかも。でも、見えないからいいか。姫の口調がだんだん激しくなる。後四回こつちを見たら、長台詞だ。

一回……………この出番が終われば、後は最後の挨拶だけだ。

二回……………早く衣装脱ぎたいよお。

三か……………

姫の袖口に血が着いている。そして、うつすらとにじんでいる。

姫の汗と混じりあっている。なんだか、へんてこな気分だ。

四回目。姫は力強いまなざしで私を見る。間違えないで、とか、できるの？とかそんな疑いは微塵もない。

(ああ、私、この目を見るのは二回目だ)

そう思った。一呼吸おいて長台詞を始めた。

『茨の道も』

あれは面接に来たときだ。私、高校のときの演劇部が楽しかったから、なるべく団費の安いここを狙ってやってきたんだ。

『桜の道も』

趣味の習い事みたいなものよ。だって、大きな声とか出すのって気持ちいいじゃない。だけど、姫に言われた。本気でやりたい人しかいない、って。あなたはどのなのって。

『私たちには選ぶことはできません』

私はやりたいです、って答えた。だって入りたかったんだもん。団費が安いから。でも入ってみてちょっと閉口した。

『それは私たちには見えるだけで、選べる道ではないのです』

だって、みんな暑苦しいんだもん。やたらと語るんだもん。私はただ練習をして、お芝居をしたいだけなのに。

『あなたには見えないのでしょうか』

人を蹴落とすこととか、だめ出しに反論するとか、そんなことよ

り練習したかった。

『私たちが今歩いている道は、二つの道の間にあります』

逃げ出すこともできたかも知れない。でも、一人じゃお芝居できないでしょ。

『それは頂のように高く、しかし平坦でどちらの道も見渡すことができます』

だから私は選んだ。一番いい方法を。

『そう、私たちは傍観者の道を選んだのです』

言い終えた。心が熱い。姫がじつと私を見据えている。そんな目で見ないで。そして、その言葉を言わないで。

『お前たちのいう傍観者の道が、頂のごとく高いものならば』
言わないで。

『茨の道を行こうという私が』
やめて。

『桜の道を見ることができないのは』

お願い、やめて。

『お前たちの道があるがためだということか』

舞台は暗転した。

目が覚めたとき、私は一人で楽屋に寝かされていた。奈落あたり
に人が集まっている気配がある。台詞の終わりの暗転といっしょに
私も暗転したんだろう。ふと見ると、私宛に小さな花が届いていた。
そんなしやれたことをする人はいない。添えてある封筒を開けると、
小さな紙切れが落ちた。

『返しておいてくれ、なか』

封筒の中には橋本さんのアンケートが入っている。そこには橋本
さんの住所が書いてあった。

全身の細胞があわ立つような感覚に襲われてあたりを見回す。あ
った。今回のアンケートだ。そこには住所が書いていなかった。

私は二枚のアンケートを握り締めて飛び出した。

『あなた方が大切なものを手放したことを知って失望した。そして、

今日もう一つ失うこととなる。私はあなた方が成長する姿を見たかったが、残念だ。せいぜい頑張ってください」

会わなければ。なかさんに、橋本さんに。

奈落を突っ切っていこうとすると、姫に声をかけられた。

「あら、走っちゃだめよ」

「お客さんは？」

「もう全部はけちゃったわ。ご苦労様だったわね。気絶するほど緊張していたんでしよう」

心臓がばくばくいつている。それは前と同じだけれど、今は、みんながねぎらってくれる言葉が、耳の中で発せられているように大きく聞こえる。

「迫力あったよ」

どうしよう。

「すごく声が出た」

どうすればいい？

「よっぽど練習してたんだね」

どんなふうによれば、伝わる？今日のアンケートに橋本さんが住所を書いていない意味を。私たちが失ってしまった二つのものが何かを。どうしたら正確に伝えられる？

「どうしたの？まだ気分悪い？」

首を横に振る。みんなの顔がはつきりと見える。ヒロインの相手役は、汗でドウランの半分が溶け出している。姫の袖口には血がついている。

「ゆうちゃんは大丈夫だったからね」

頷く。言葉が見つからない。

「ゆっくりしてていいんだよ？」

心配されている。ここはあいまいに笑おうか。

「大丈夫？空気、読めてる？」

はっとする。笑い声に混じってなかさんの声が聞こえた。マジックで書いたふと文字のように目の前にも浮かび出た。手のひらで押

し付けられたように、胸にこたえた。

「空気は読むものじゃない。作るものだ」

私は二枚のアンケート用紙を、ぎゅうっと握り締めた。少し湿った紙の感触がした。そして、からからに乾いた喉から、声を振り絞った。初めて姫に会ったときは違った、温度差を隠すために嘘をついたことになってしまった、本当の魂を届けるように。

大切なもの（後書き）

ブラックユーモアあふれる作品に触れて、執筆しました。正論は時に酷く、傷つけられたものを守る正義として放った矢は時に排除という名で正論を打ち砕きます。

何が正しいのかわかりません。ただ、どんなことから学ぶと
いう姿勢だけは忘れないでいたいと、切に思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6903d/>

正義と正論とその他

2010年10月8日15時56分発行